資料

公害学習から地域再生へ

～沼津・三島コンビナート建設反対運動をふりかえり
今日の地域再生運動との接点を探る学習会の報告～

高田 研（都留文科大学）・渡辺 豊博（グラウンドワーク三島）・西岡 昭夫（沼津市民協議会）・
宮本 憲一（大阪市大・滋賀大学名誉教授）・藤岡 貞彦（一橋大学名誉教授）・
岩松 真紀（東京農工大学大学院）・降旗 信一（東京農工大学）

From Pollution Education to Community Restoration: A Study Group Report on
Connections between the Protest against the Construction of Numazu-Mishima
Industrial Complexes in the 1960s and Community Restoration Activities Today

Ken TAKATA (Turu Bunka University), Toyohiro WATANABE (Groundwork Mishima),
Akio NISHIOKA (Numazu Civic Association), Kenichi MIYAMOTO (Osaka City University,
Shiga University), Sadahiko FUJIOKA (Hitotubashi University), Maki IWAMATSU (Graduate
School of Tokyo University of Agriculture and Technology), Shinichi FURIHATA (Tokyo
University of Agriculture and Technology)

（受理日2012年2月26日）

I はじめに

社会教育研究全国集会は、社会教育推進全国協議会と現地実行委員会の共催（単独開催もある）で行われる社会教育の実践者・研究者等による、年一回の研究・交流の場である。1970年代以降、「環境」に関する分科会が設けられてきた。2011年8月28日（日）、第51回社会教育研究全国集会（静岡集会）の第6分科会として学習会「沼津・三島フィールドワーク」が開催された。

宮本憲一（1979）は、1964年に展開された沼津・三島の石油コンビナート誘致反対運動の意義について「明治以来100年にわたる地域開発に関する『資本の論理』を『住民の論理』がねじふせた画期的な勝利であった。この成功に力を得て、公害反対をはじめとする住民運動は燎原の火のごとく全国に広がっていったのである。しかもこの運動は、三島・沼津型と言われる『学習会』を軸とする運動方法論をあみだした。『三島・沼津に学べ』ということばが全国の運動家の目標となった」と

位置付けている。このような先駆的な環境教育実践が展開された沼津・三島では、今日、特定非営利活動法人グラウンドワーク三島を中心とした湧水保全活動が展開されている¹⁾。

こうした地域再生運動と1960年代に展開された石油コンビナート誘致反対運動とがどのような接点を有しているのかを確認することは、公害教育と環境教育の連続性を考える上で重要といえる。今回の学習会「沼津・三島フィールドワーク」では、午前中が沼津市図書館においての報告会、午後は牛臥山公園（沼津市）、柿田川湧水（清水町）、源兵衛川（三島市）を訪ねた。報告会では、1960年代の運動に中心にかかわった西岡昭夫と今日の三島湧水保全運動に取り組む渡辺豊博、全国のスタディツアーを通して公害学習の今日的な位置づけを目指す高田研が報告をし、さらに宮本憲一、藤岡貞彦らが集い、沼津・三島コンビナート建設反対運動と今日の地域再生運動との接点を探った。

筆者らは1964年から47年を経て沼津・三島の

問い合わせ先 〒183-8509 東京都府中市幸町3-5-8 東京農工大学農学部 朝岡研究室 岩松真紀

地で開催されたこの学習会自体に1つの歴史的な意味があったのではないかと考える。そこで以下に今後の研究に向けた基礎資料として、Ⅱで当日の学習会の内容を資料としてなるべく忠実に報告し、Ⅲで運動にかかわった宮本憲一・藤岡貞彦が、当事者としてこの学習会の意義を振り返る。

Ⅱ 学習会当日の報告

1. 西岡昭夫氏の報告「暮らし様はどうして決まる－住民運動が創った風土－」

1) 柿田川の水の使い途

柿田の水は“かね”で売らせないと住民は長い間主張してきた。その水は47年前、1日100万トン、1トン2円足らずで売りに出た。売り手は県、買い手は住友化学。残り20万トンは生活用ということに“柿田川を守れ”のスローガンが加わった。四日市石油化学コンビナート排水が伊勢湾を汚し石油臭くなった魚の匂いを学習会場で嗅ぎ、住民の地域意識は駿河湾から伊勢湾に拡大し、守り合わねばならない仲間の数が一気に増えていった。“無害の実績証拠がなければ石油工業進出を絶対許さない”そんな声明は仲買商組合からである。土地不売同盟の三島市中郷農民耕運機隊と、沼津の水産業者の三輪トラック隊の共同作戦を可能にした。

住民の地域観拡大や職業の壁が取り払われたのは学習会にもあった。集まり場に話し手がいく。誰彼も話し手に加わる。住民学習会が地域の風土・歴史の発掘の場になり新たな民話を育てる巢になった。仲間の存在、自己の価値の発見に大きな役割を果たした。沼津工業高校生徒達の“鯉のぼりによる気流調査”が、政府調査団のヘリコプター調査より信頼を得た原因はここにあったと思われる。

1964年9月13日、石油コンビナート反対総決起集会は予測1万が2万5千人にふくれ、人口15万人の沼津はガランとなった。友人増山寛治氏は反対同盟会長の父を助け、計画地近い神明宮で「怨敵退散！富士石退散！」と護摩を焚き、かがり火にひと型を投げ込む住民の警護役をした。医師付き添いの“おこもりデモ”のうちわ太鼓が街

に響いた。石油コンビナート反対闘争後7年、1971年、再び起きた港湾建設反対闘争で農大出の持ち前を発揮、「相手が切るならこっちは植える」と松原に乗り込んだ。以降、県庁や市役所訪問、富士山麓、防潮林植生調査や植樹、柿田川保全に毎日を送っている。

2) 海岸を守る戦い

第7次総合計画中の1969年3月、ヘドロ堆積の富士市田子の浦港に代わり沼津の千本浜、我入道、牛臥海水浴場に白羽の矢。田子の浦港をしのぐ工業港建設計画が示された。我入道浜700mに20万m³の泊地、施設、千本浜海面3万7千m³を工業用に、石油計画で日本一の140万kw火力計画のあった牛臥海水浴場の港計画も出た。1971年4月4日、千本公園で「千本浜埋立て反対同盟結成大会」の壇上から子どもの声。「これ以上、浜をなくしたら、遊ぶところや泳ぐところが無くなってしまいます」。佐藤総理宛の手紙である。プラカードを担いで集まった多くの子どもたちが仲間のアピールを聞いた。建設計画に反対する自治会は50を超え、文化団体、婦人組織、労働組合等多彩な住民が結集、地区労青年部が学習会講師を務めるなど、お手製の住民運動は石油コンビナート反対闘争に学ぶものも多かったが、違いも見えていた。

3) 意思明瞭が絆を強くする

「コンビナートのように市民協議会が必要と思う」。1971年千本浜埋立て話のさなかに増山氏が提案した。会場は、松植え経験が長く、後に市民協会長になる空手先生の道場。「コンビナートと同じに保守を巻き込んだ地域ぐるみの闘い」がいいと提案したのは他地域から来ていた連合自治会長である。3カ月後の5月、市民協議会結成大会に1500人が集結、大画面のスライド学習、ヘドロ闘争中の富士市民協会会長挨拶が続く壇上で、反対議員席の人数が目立っていた。石油闘争で、山川を越え県や国に陳情に行くより、地元でのアピール効果が大きいことを経験した。やがて「市議会議員」氏名入りの大看板が駅前や結婚式場のある神社境内、市役所前等目立つ場所に◎△付きで立てられた。

“お互い意思をはっきり”するのは丁寧な扱いと理解された。石油闘争で、互いの意思の確認が仲間を増やし、絆を強くする経験をしていた。

4) ミイラにならない

6月市議会で白紙撤回された港湾計画も、石油闘争で経験のない新たな事態を招いた。反対住民参加で港湾・千本の将来基本計画策定のための諮問機関「港湾・千本対策研究懇話会」案が市民に提案された。喧々諤々の「ミイラとり」論争後、石油後積んできた経験を生かす場と位置付け、政治行政に市民が直接参加する提案を受けることになった。開闢以来のこと「議員の仕事への介入」と反発する議員もいた。

5) 学者ほど楽な商売はない

石油闘争で政府調査団と東京で対決し、役人に任せばなしの調査書の誤謬がその場で訂正・削除された。「学者ほど楽な商売はない」「学問は一通りだが学者には二通りある」「箱根を越えて来る学者には警戒が必要」等、帰り道で話されたこの江戸土産は今も生きている。

6) 松苗運動の場が学習会

懇話会は13ヵ月、総会17回、専門委員会10回、運営委員会は20回に及んだ。政党市議、僧侶、医師、店主、業界役員、社長、教師、労組員等34人構成、元県吏員二名を除けば市民懇話会である。役所中の論議の一部は住民に知れたが16万市民の運動にはならない。増山氏たちの目は海岸に注がれた。ここに開闢以来最大の人を集めた松苗植え運動が始まった。6万本の松苗を植えながらの語り合いから沼津の民話が誕生していた。現在、松は「沼津の生命線」をなし、松の根運動の歴史を残している。

7) 科学と地域と生活

この項目は、沼津の港湾建設反対運動さなか執筆の月刊社会教育1971年3月号拙稿表題である。石油運動後、三島に配転になり5年経過、環境裁判や大学講師、福島原発等、住民運動の環境調査で各地に出向いていた頃でもある。末文の一部を紹介し本節のしめくくりとする。

「地域における少人数の集会の中で発言し行動するうちに、科学することの喜びや自信を見出

し、集団の中の自己の存在の意義やよろこびを見つけることにより、集団や組織の必要性を発見していったのである。生活と地域はこうして離れる事のできないものになっていく」。

増山氏も私もこうして育った住民であろう。

2. 渡辺豊博氏の報告「三島でのグラウンドワーク活動」

1) グラウンドワーク三島の活動

グラウンドワーク三島は、住民・企業・行政のパートナーシップを仲介することを通して、「水の都・三島」の原風景を再生し、子どもたちに受け継いでいくことを目指す特定非営利活動法人(NPO法人)である。「右手にスコップ、左手に缶ビール」を合言葉に、みんなで協力して身近な環境改善に取り組んでいる。

かつて「水の都」と呼ばれた三島市は1960年代、産業活動の活発化による地下水の汲み上げによって湧水が減少し、市内を流れる川は汚れ、ドブ川となってしまった。このふるさとの環境悪化に問題意識を持った市内8つの市民団体は、水辺自然環境の再生と復活を目指して、1992年9月に「グラウンドワーク三島実行委員会」を発足させた。

グラウンドワークは、英国のサッチャリズムから始まった市民・NPO・企業・行政のパートナーシップによる環境改善活動であり、グラウンドワーク三島が全国で最初にこの運動を日本に導入した。

ドブ川化した源兵衛川の再生、絶滅した水中花・三島梅花藻(ミシマバイカモ)の復活、歴史的井戸や水神さんのお祭りの再生、ホテルの里づくり、学校ビオトープの建設、住民主体による公共施設の維持管理等、50か所以上のプロジェクトを実践してきた。1999年10月には特定非営利活動法人の認証を受け、現在では20の市民団体が参加したネットワーク組織となっている。

これら水辺環境の再生から始まった活動は、環境再生から地域再生へと拡大し、毎年約3,000人、130団体が国内外から視察に訪れている。近年では、地域の人的資源、環境資源を生かした「せせらぎシニア元気工房」の開設や、遊休農地を活用

したそば・小麦栽培などの「環境コミュニティ・ビジネス」の創出、エコ・スタディツアーなどの観光振興、「三島街中カフェ」の開設によるにぎわい再生、さらには、これらのノウハウを海外に普及する「国際環境交流事業」にも取り組んでいる。

2010年度は、内閣府「地域社会雇用創造事業」に採択され、これら多様な実践現場を、先進的な現場モデルとして活用し、地域ビジネスやNPOマネジメントを学ぶ「グラウンドワーク・インターンシップ」事業に着手している。

2) コンビナート建設反対運動との接点

この地は富士山からの湧水が大変豊富できれいな場所だが、ちょっとした油断や甘えがあって25年くらい前には汚れてしまった。その前の先輩たちが美しい三島・沼津を守ろうという先進的な市民運動を展開した。その一方で、自分たちの足元で同時に起きていた（上流地域の）地下水利用型企業の進出、その怖さ、潜在力にまでやや目が届かなかった。目の前の大きなインパクトに対して市民が結集して大きな力を発揮したことについて先輩たちを尊敬しているが、自分たち第二世代は、その隙間でおきた郷土の水辺環境を守る仕事を引き継ぎ皆の知恵を集めて再生してきた。

自分は子どもの頃、1960年から64年頃だと思うが毎晩、公民館に明かりがついて窓ガラスを全部はずして、その外まで人があふれていて中を覗き込んでいたのを覚えている。三島の市内全体が、特に農村地域の女性たちを中心に高揚感に包まれていた。その時のことは「ずいぶん興奮しているな」といった記憶しかないが、それを引き継いで自分たちが今の運動を始めたのが1983年頃からで、この源兵衛川の運動が動き出したのが1990年、グラウンドワーク三島ができたのが1992年なので現在19年目に入っている。市民運動がそのように重層的に重なり合って市民の潜在的な意識が有機的に結合して町をつくりあげていく、そういう意識が三島の人のDNAの中にある。三島の川が汚くなったのは1964年頃からで、その頃から20年以上、川は汚れてきた。コンビナート運動の中心的な担い手は農村部の人たちだった

が、都市部の人たちの意識は少し違っていたのではないと思う。だから我々は担い手を自分たちで探した。川が汚れたのは、地域の住む皆がバラバラに動いたことでそれぞれの特性を発揮しえず大きな力になりえなかったと考えた。だから、もう一度、真ん中に調整仲介役が入って地域の方にもう一回川の原風景を思い出してもらって意識を再生してもらいたいと考えた。それで5年～10年の長期的な再生計画や組織的な基盤づくりを行ってきた²⁾。

3. 高田研氏の報告「沼津／三島へのまなざしー公害地域の今を伝えるスタディツアーの実践からー」

環境教育の中でかつての公害教育の経験があまり引き継がれていないことを問題と感じており、今回の学習会の企画に参加した。学習会の意義を考える上で有意義と思われる最近の公害学習の取り組みを以下に紹介したい。

2011年8月8日～11日に、公害地域再生センター（おおぞら財団）では、今年で3回目となる「公害地域の今を伝えるスタディツアー」（地球環境財団助成事業）を実施した。1年目は富山「イタイイタイ病」、2年目は「新潟水俣病」の地域再生の今を訪ねてきた。今年は西淀川大気汚染公害地域の再生である。

このツアーの目的は「伝え手」を育てる事、「伝え方」を探る事にある。募集対象は大学生と小中高の教員。東京、関西から毎年50名余の参加者を集めて実施する。

実家が福島県白河市の専業農家で、原発事故の影響でレタスが全面出荷停止となっている本校社会学科3年の学生がいち早く応募した。参加理由は、大気汚染公害地域の再生事例から「福島再生」の糸口を探すためだという。

このツアーの原点は2008年8月のイタイイタイ病の原因企業である神岡鉱業の現地立ち入り調査にある。そこで原告、弁護団のみなさんから私たち環境教育研究者／実践者への期待の言葉をいただいた。30余年のたたかひの成果としてここまで地域を再生し、加害企業もふくめた関係を再構

築して来たのだが、この事実を後世に伝えることまでは力が及ばなかったという。私たちは、重大な宿題を受け取った。どのようにすれば公害地域の今を次世代に伝えることが可能なのか。

ツアーにおいて参加者に求めた事は「公害問題の今を学ぶ」こと「自分に何ができるか」という2つのゴールである。極めて悲惨で深刻であった公害地域。償う事の出来ない歴史。その地域が長い地域再建の道のりを越えた今この空気。その中に身を置き、人々の声に傾聴すること。そこで各々が学んだ、感じたことを自分の言葉で表現すること。そこからの次の主体としての行動を紡ぎ出して行く。

富山「イタイタイ病」のツアーでは「戸籍を懸けた闘い」を牽引して来られた故江添久明さん(1926～2011.3)からお話をお聞きできた。「こんなに天下を騒がせて、これは鉱毒のせいじゃなく、おまえらがろくなものも食わせんとむやみに働いとったからだ…という形で押さえ込まれてしまったら、身もふたもないですわ。だから石にかじりついてでも、勝たにゃあならん。……」と当時を振り返る。(財団法人公害地域再生センター2010)

「新潟水俣病」のツアーでは第一次訴訟を勝訴に導き、第2次訴訟では幹事長を勤めるも、和解に踏み切ろうとする訴訟団から解雇された坂東克彦弁護士(1933～)が、滔々と流れる広い阿賀野川河口に立ち、雨が断続する堤防に立ち被害の発端であり訴訟の舞台となった松浜の集落を見下ろしながら学生たちに「和解金という毒まんじゅうを食べたらだめなんだ……」と繰り返し語りかけた。

それぞれの人生を掛けた闘い。お互いに「想い合う」気持ちを内に秘めながらの決別のドラマ。聴き取りを通して、参加者はそれぞれの正しさの間に身を置いていることに気づいていく。教科書では40年前に終わったはずの「新潟水俣病」という公害問題。まだ終わっているわけではない地域史の中に身を置いているというという貴重な瞬間。その経験であった。ツアーに参加した学生達は、イタイタイ病を闘った江添さんや坂東弁護

士に、国語の教科書で習ったという田中正造を重ねる。社会正義を貫くという生き方への感動ことこそ彼らを行動へと誘う力となる(財団法人公害地域再生センター2011)。

今回お話を聞きし、また一緒に地域を巡検していただくことになった西岡昭夫氏は私ども公害教育に些少なりともかかわって来た教師にとっては、険しい路に一筋の光を見せて下さった大先輩である。

西岡氏の地域の景観／環境を守る運動は「市民」を醸成し、三島グラウンドワークという市民運動に繋がっていく。都留文科大学教授でもある渡辺豊博氏は、地域を創ることだけに留まらず、日本中の若者を集め、三島の地を市民運動を学ぶ拠点として位置づけて来た。脈々と繋がるこの市民運動から私たちが学ぶ事は多い。

Ⅲ 学習会「[沼津・三島フィールドワーク]の意義」

1. 市民運動の原点に立って原発公害を考える(宮本憲一)

1963-64年の三島・沼津・清水二市一町の石油コンビナート阻止運動は、日本の環境政策を革新し、政府の地域開発を変える劇的な成果を上げた。この運動は日本で最初の住民による環境アセスメントを行ない、それをもとに300回以上の学習会をかさね、公害は怖いという感性的な認識を科学的な理性にまで高めて、広域の長期間の活動を成功させた。環境教育のはしりでもある。私は1964年9月11日この運動のクライマックスであった最後の1千人を超える学習会に呼ばれ、1日置いて9月13日の石油コンビナート進出反対沼津市総決起大会に参加した。その日は朝5時ごろから漁民が船で大漁旗を掲げて、港内を回り、陸では有権者の3分の1の2万5000人を超える大デモが、繰り広げられた。耕運機や消防自動車を含めて、市内のすべての自動車が参加したような盛観であった。私は地元銀行の支店長の奥さんの車に便乗して朝からデモや大会を見学した。車を独占して悪いので、彼女に「おつれあいはゴルフにでも行かれていますか」と聞いた。彼女は笑って

「あそこを歩いていますよ」と指をさした。みると彼女の夫君の銀行の支店長がブラックカードを持って、デモをしているではないか。そのブラックカードには、私が講演した時の話からとった「植民地型開発反対」とあるではないか。これを見た時に私は、この運動は勝利すると確信した。後に経団連の公害対策委員長はこの運動は、内灘－砂川に続くアカの運動だといった。全くの誤認で、財界が公害の認識を見誤ったことを象徴している。この沼津の運動は、地域の農漁民、医師、知識人、婦人会、町内会、経済人を巻き込んだ地域ぐるみの運動であった。

それから約50年の月日がたって、全く久しぶりに当時の環境アセスメントと学習会の中心にいた西岡昭夫氏と増山寛治氏にあった。お二人とも元気で、今もなお市民の社会教育や、地域の環境保全に活躍されていることをこの目を見て、大きな感動をした。この運動はコンビナートの立地予定地の二市一町をひとつくりにして紹介されるが、それぞれその運動には違いがある。三島市は市長が早くから反対を表明したのだが、沼津市は先の住民大会までは、市長も市議会もコンビナート誘致賛成であった。したがって、沼津の住民の運動は最も長く且つ苦闘した。この違いが今も残り、三島は町づくりのNPOがスマートに運動しているのに対して、沼津は半世紀にわたって、地に足の付いた市民運動が継続して、環境を守っている。

写真 再会を喜び合う増山氏(左)、宮本氏(中央)、西岡氏(右) 2011.8.28 沼津市牛臥山公園にて

この集会で私は「原発災害は最悪の公害であるが、これまで環境教育や運動の中では比較的弱い分野ではなかったか」と述べた³⁾。1967年三島・沼津の運動が直接的に影響を与えて、公害対策基本法が提案された時に、放射能を公害として扱うことが研究者からも提案され、議会でも議論された。ところが政府はこれを法の条文には入れたが、実際は原子力基本法にゆずるとした。このため、放射能の被害防止は環境庁のような規制官庁ではなく、原発を進める通産省にゆだねられた。国際機関の指摘で、ようやく環境省の外局に原子力の規制官庁ができることになった。それがうまくいくかどうかは、住民の監視が必要であろう。公害対策基本法に放射能が入っていなかったこともあって、原発災害は公害反対運動や環境研究の中で、別格となってしまった。

国民は原発をゼロにと望んでいるが、政府や財界は早急に原発を再開したい。巻き返しが始まっている。原発阻止・再生エネルギー中心のエネルギー政策を求める三島・沼津型学習会による運動が求められる。

2. 温故知新(藤岡貞彦)

今夏、静岡・沼津で開かれた社会教育研究集会に、宮本憲一氏と西岡昭夫氏が講師として参加して下さると知った時、驚きと喜びで胸が熱くなった。お二人は私の恩人であるからである。

集会の感想を求められているのだが、それよりも、今を去る45年前、1966年に、お二人に出会い学んだ事実をご披露し、私の公害・環境教育に開眼した契機をご紹介してみたい。それは、雑誌『世界』(1966年4月号)に掲載された「地域開発政策の総合的批判」の一節にふれた時のことであった。

「一昨年の三島・沼津のコンビナート誘致反対運動は、いまの地域開発政策の廃案という要求をはじめ正面にかかげて成功した。この運動は、今後の地域開発にとりくむ住民にとって、無限の教訓をあたえるものである。

最初の運動のきっかけは、公害に対する感性的な恐怖心であった。美しい郷土の自然、伝統

のある生産性の高い農漁業、人間の健康、これらを公害から守ろうという共通した、わかりやすい目標が、住民運動の幅をひろげた。だがこの感情だけの運動ならば長続きはしなかったであろう。三島市長の委嘱で地元の国立遺伝研究所、沼津工業高校の研究者が中心になり、住民の援助で公害の調査が行われた。この調査結果をもとにして、三島市長はコンビナート誘致に反対を表明した。また調査の結果は、何百回となくひらかれた町内会・婦人会・青年団などの小集会で高校の教師たちによって啓蒙された。沼津医師会も独自の研究会をもち、これにもとづいて、反対を表明した。このような地元の研究的な調査と啓蒙運動が、感情的な恐怖心を科学的な確信にかえたのである。

三島・沼津の運動は、公害反対を目的としていた。しかし、これこそが郷土を発展させようとする〈住民の地域開発運動〉であったということができる。住民の自主的な学習、創意工夫、郷土愛が、これほど発揮された例は、いままでないことであろう」（傍点引用者）。

覚醒とはこのことである。論文に打たれた筆者が、66年夏、矢も楯もたまらず、思いつめて沼津に西岡氏を訪問し、「沼津工業高校の研究者とはどういう指導者なのか」、「地元の研究的な調査と啓蒙運動とはどういう学習なのか」をつぶさにくがったのは、天の啓示によってであった。西岡氏にうかがった住民運動の夜明け、それを支えた学習の先駆け性に、ただおどろくばかりだった。

論文の副題には、「深まる病患と地域社会の危機」とある。今にしておもえば宮本論文は世紀を超えた予見であり、西岡実践は住民の窮況を打開する歴史的な仕事であったのだ。

2011年の今、日本人のすべてが、東北大震災と原発事故の前で、社会の「病患」と「危機」に直面してたたずみ、考え、たたかっている。

今夏の宮本講演は、「東日本大災害・TPP問題と国土環境問題」と題されている。1966年以降、45年間の理論的総決算を、この題名が示している。西岡氏が、あのなつかしい64年9月の沼津大集会のスライドをみせてくださったのも、氏の生

涯の総括にちがいない。

爾来、45年間の長い歳月をへて、宮本氏の理論と西岡氏の実践が、3.11後の日本で、今、生きてはたらいっていることを、この集会は、満場の聴衆に知らしめ、そのことによって日本の公害・環境教育の源流を明示してくれたのだった。これを「温故知新」の学びといわずして、何と言おう。

Ⅳ まとめ

1963年新産業都市建設促進法によって指定された東駿河湾工業整備特別地域は、もっとも石油コンビナートが進出できる条件のある候補地として期待された。静岡県誘致計画に端を発する三島市・沼津市の石油コンビナート建設反対運動（1963～1964年）の特徴のひとつに、住民自らが行った科学的な調査がある。宮原誠一は「この住民運動は、その主要な側面の一つにおいて、公害発生の有無をめぐる調査と調査とのたたかいであった。通産大臣が任命・派遣した公害調査団と、三島市長が独自に編成した公害調査団の報告は多くのくいちがいをみせ、どちらが真実であるかをめぐって、住民の学習活動がおこなわれた。とくに沼津市ではそれは学習運動としてたかまった。そして、三島市長が編成した調査団に団員として加わっていた県立沼津工業高校の四人の教師が、住民の学習会に客観的資料を提供し、図表やスライドやハミリ映画などの視覚的手段もつかって解説に当たった」（宮原 1966）とまとめている。

公害教育を日本の環境教育実践の流れとする主張の特徴は、公害問題を出発点として住民運動と結びついた学習・教育を志向し、「権利としての教育」を基盤に教師の役割や可能性を重視しているところにある（朝岡 2005）。「公害教育から地域再生へ」の流れは、住民が自らの課題に気づき、全体の課題でもあると共有し、科学的な学習を深め、行政とともに課題を解決していく方向になり、最終的には安心して住める地域がつけられる「地域をつくるまなび」への流れともいえる。一方、「未だ『公害教育とは何であるのか』ですら明らかでない段階で、それを『地域づくり教育』

とか『まちづくり学習』といったさらに多義的な教育概念と関連させて論じようとするのは無理な試み」(安藤聡彦 2009)といった指摘もある。今回の学習会は、1960年代の公害教育と今日の湧水保全活動の現場を実際に訪れ当事者の話を聞く、過去から現在への接点を探るものであった。公害教育とは何であり環境教育にどうつながるのか、という研究課題に寄与することを願うものである。

注

- 1) 引用文献以外に、この学習会で沼津・三島の公害教育・環境教育関連の書籍として紹介したものに以下のものがある。
 - ・福島達夫『環境教育の成立と発展』国土社, 1993
 - ・福島達夫『地域開発闘争と教師』明治図書, 1968
 - ・星野重雄・西岡昭夫・中嶋勇「石油コンビナート阻止－沼津・三島・清水、二市一町住民のたたかい」技術と人間, 1993
 - ・西岡昭夫「地域と生活における科学」『岩波講座 教育の方法6』岩波書店, 1987
 - ・島田修一・藤岡貞彦『社会教育概論』青木書店, 1982
- 2) グラウンドワーク三島の活動などについては渡辺(2005)に詳しい。この中では石油コンビナート進出阻止運動は「活動のベースとなった

先人の取り組み」として位置づけられている。
 3)「この集会」とは、第51回社会教育研究全国集会である。宮本憲一氏が講演を行い、その内容の一部は宮本(2011)に記録されている。

引用文献

- 安藤聡彦, 2009, コメント, 環境教育19 (1), 93-94.
- 朝岡幸彦, 2005, 環境教育とは何か～目的・概念・評価『新しい環境教育の実践』高文堂出版社, 11-31.
- 宮本憲一, 2011, 「第一全体会 特別講演 東日本大震災・TPPと国土・環境計画の改革 宮本憲一」『第51回社会教育研究全国集会報告書』, 社会教育推進全国協議会, 16-19.
- 宮本憲一, 1979, 「市民誕生－草の根民主主義への道」, 宮本憲一編, 『沼津住民運動の歩み』, 日本放送出版協会, 283-294.
- 財団法人公害地域再生センター, 2010, 『公害地域の今を伝えるスタディツアー 2009－富山イタイイタイ病の地を訪ねて－』, 財団法人公害地域再生センター(あおぞら財団), 64pp.
- 財団法人公害地域再生センター, 2011, 『公害地域の今を伝えるスタディツアー 2010－新潟水俣病の地を訪ねて－』, 財団法人公害地域再生センター(あおぞら財団), 70pp.
- 渡辺豊博, 2005, 「清流の街がよみがえった 地域力を結集－グラウンドワーク三島の挑戦」, 中央法規出版, 239pp.